

若狭湾ファミリーフェスティバル①～うみであそぼう～

1. 参加者

募集人数	応募者数	参加決定数	参加者数
300名	306名	306名	277名（宿泊：227名、日帰り：50名）

2. 事業内容（概要）

◆ねらい

- ・ 家族で一緒に活動をしながら、海の魅力や面白さを感じてもらう。
- ・ 波の音を聞きながら夏の若狭湾を感じ、自然の素晴らしさを知ってもらう。
- ・ 自然体験の経験が少ない家族に、その楽しさや面白さを伝える。

◆期日・期間

令和元年8月24日（土）～8月25日（日）＜1泊2日＞

◆後援

福井県教育委員会、岐阜県教育委員会、愛知県教育委員会、
滋賀県教育委員会、京都府教育委員会

◆参加者分析

本事業の対象は、開催要項やチラシには「海で遊びたい家族・グループ」と記載しており、幼児から小学生（小学1年～3年生）のいる子どもとその保護者を想定して計画した。広報は、福井県嶺南地域と滋賀県高島市、京都府舞鶴市の各幼稚園、保育園等と小学校に配布した。また、当施設を利用した12団体に退所時に配布した。

申込数は、募集人数の300名を超えたが、キャンセルがあり、宿泊227名、日帰り50名の参加となった。一昨年度（平成29年度）は、325名（宿泊：270名、日帰り：55名）と非常に多くの参加があった。昨年度（平成30年度）は、スノーケリングを活動に取り入れ、募集人数を200名としたために、247名（宿泊：197名、日帰り：56名）であった。また、下の表1の0歳から15歳までの参加者数にあるように、子どもたちの参加も多く、当施設のことや海での体験活動の普及の機会としては、有効な事業であると感じる。

表1. 参加者数（0歳～15歳）

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	合計
男	0	1	1	14	3	9	11	9	11	7	4	8	1	0	1	0	80
女	0	2	4	7	5	8	11	8	5	5	2	2	0	1	0	1	61
合計	0	3	5	21	8	17	22	17	16	12	6	10	1	1	1	1	141

表2. 都府県別の家族・グループの参加数

都府県名	福井県	京都府	滋賀県	大阪府	愛知県	富山県	奈良県	東京都	岐阜県	兵庫県	合計
参加数	33	15	12	4	3	3	2	2	1	1	76

表2には、都府県別の参加者家族・グループ数をまとめた。チラシを配布した福井県、京都府、滋賀県からの参加が多かった。こちらの3県は、チラシを配布した地域が多く参加していた。それ以外は、ホームページを見たり、また、他施設でフェスティバル等で当施設のことを知って参加したりとのことであった。特に、本年度は東京都からの参加もあり、この若狭地域の海の魅力は、広い範囲からの参加

者を得られる可能性もある。インターネットなどを活用しながら、今後も幅広い広報を行っていきたい。

◆企画のポイント（日程・特色など）

<日程>

8月24日(土)	8月25日(日)
11:30～ 受付 昼食 ※希望者のみ	7:00 朝のつどい 7:30～ 朝食・清掃・荷物移動
12:30 宿泊についての説明 ※宿泊の方はこの時間までにおこしください。	9:00～ 海の体験開始 選択活動 野外調理体験説明
13:00～ 開会式 海の体験開始	12:00 解散 11:30 昼食(～13:30食堂閉店)※希望者のみ
16:30～ 選択活動 テント設営説明(テント泊希望者)	
17:00～ 夕食・入浴等 ※	
19:30 キャンプファイアー	
22:00 就寝 (※夕食 17:15～19:00／入浴 17:00～22:00)	

当施設の利用状況を見ると、夏休み期間中は、ほとんどの日が団体利用で満室となっており、家族やグループで利用することが難しい日が多い。団体のみならず、海が一番良い時期に、家族やグループなどのより多くの人たちに、海の魅力や面白さを体験してもらいたい、ゆったりと海と触れ合ってもらいたいと実施している事業である。プログラムを考える際には、これまで実施してきた2回の事業から“引き算”をして、参加者に本当に体験してもらいたいことは何かを検討していった。当施設の一番の魅力は何といっても目の前に広がる美しい海である。透明度も高く、様々な生き物があるこの若狭湾の海と思いきりふれあう体験をしてもらいたいと考えた。

また、普段の生活は、大人も子どもも時間を気にして生活している。時間に縛られず、飽きるまで海と関われるように、ゆったりとした時間配分をすることとした。また、家族やグループで夏休みの楽しい思い出を作ってもらいたいと考え、「テント泊」と「野外炊事」も加えることとした。体験してみたいと思ってはいても、用具が必要であったり、どのようにしていいのかわからなかったりと、すぐにできるものではない。この機会に体験してみたいと思えばできるように、選択活動として設定をした。当施設には、キャンプ場として整えられた場所があるが、あえてそこを使わず、浜にテントを張ることとした。これも海と触れ合ってもらうための工夫の一つである。海に入るだけが海の体験ではない。波の音を聞いたり、砂浜の感触を感じたりすることも、海の体験として考えられる。

海ならではの新たな試みとして、スラックラインを海の上に張る「ウォーターライン」を行った。スラックラインは、これまでもフェスティバルで実施していたが、今回は、海の楽しみ方を広げるためにも、カッター桟橋とクレーンの支柱を活用して行うようにし、その実施にあたっては、福井県敦賀市の「敦賀スラックラインクラブ」と福井県鯖江市の「Syn@～(しなっと)」の2つのスラックラインチームの協力を得て実施した。

◆運営のポイント

○安心して活動ができるために、ライフジャケットを貸し出す

当施設では、普段、団体利用での水泳活動においては、ライフジャケットの貸出は原則行っていない。しかしながら、幼児を対象とした海の体験活動において使用するためのライフジャケットが100着、スノーケリング用が40着、シーカヤック用が40着、その他予備も含めて、200着程度あることから、それらを使ってもらえるように準備することとした。今後、普段の活動においても利用できるようにするための試行としても考えている。

○家族やグループの交流の場としてのキャンプファイアーを実施する

夜には、若手プロパー職員を中心にキャンプファイアーを計画し、実施した。多くの人たちが集まるせっかくの機会でもあるので、少しの時間でも交流ができるように取り入れた。海で

の活動をした夜で疲れもあり、小さな子どもたちも多くいるので、自由参加とした。

○フェスティバル終了後も海の活動ができるようにする

1泊2日の事業であるため、1日目の午後、2日目の午前しか、活動時間が取れなかった。子どもたちがもっと遊びたいと思ったり、時間があつたりして、2日目の午後についても、もし希望があれば、海での活動ができることを案内するとともに、フェスティバルの片付けと並行して、対応できるような体制を整えることとした。

3. アンケート結果

(1) アンケート

＜参加者＞

項目	4	3	2	1
①事業全体の感想は、どうでしたか	84.6	15.4	0.0	0.0
②事業全体の進め方は、どうでしたか	74.5	25.5	0.0	0.0
③青少年自然の家スタッフは、どうでしたか	88.5	11.5	0.0	0.0
③海の活動は、どうでしたか	90.4	7.7	1.9	0.0
⑤キャンプ、野外炊事、キャンプファイアーなど、 はどうでしたか（体験した場合のみ記入）	93.8	6.3	0.0	0.0
⑥食事や食堂の人は、どうでしたか	52.1	39.6	6.3	2.1

（4とてもよい 3よい 2すこしよくない 1よくない）

(2) 参加者の声

○いろいろな経験ができ、また来たいと子どもたちと話していました。①

○家族で協力できたことがとても良かったと思っています。①

○子どもが海の活動に夢中でした。①

○ゆっくり自分達のペースで楽しめたので良かったです。②

○ライフジャケット、ありがたいです。③

○子も親も楽しませて頂きありがとうございました。（大人は2日目はフラフラでした）④

○キャンプファイアーがとても楽しかったです。家族での参加だったので他の家族の方と話す機会がなく少しさびしいような気もしていましたが、ゲームで少し話をすることができて良かったです。（その他）

○あぶない時、親目線できちんと注意していただきありがたかったです。（その他）

●16時に海の活動が終わって、お風呂が17時なので、早くお風呂に入りたいかった。寒くて15時にあがったのに、お風呂まで待つのが長かった。②

●部屋は大人にしてみたら、ちょっと狭い、暗い、臭う。（その他）

●大阪から来ているのですが、大阪市は、毎年8月26日から2学期が始まるので、この事業が始業式の前日のため、早く帰らないといけなのが残念です。もう少し日程を早目で調整してもらえればより参加しやすいのですが…。（その他）

●時間が決められていたことが気になりました。（その他）

4. 成果と課題

(1) 成果

○施設の一番魅力的な時期に多くの人に来ていただく機会を設けることに効果がある

本事業を実施して、3年目であるが、一昨年、昨年度の課題を踏まえて、海では「水泳」と「磯観察」のみ、「テント泊」と「野外炊事」を別の日に実施するなど、簡素化し、ゆったりと自然の中で過ごしてもらえるようにしたことで、家族やグループで海の魅力や面白さを味わってもらいたいという目的は十分に達成できたのではないと思う。保護者が、子どもたちが楽しそうに海で遊ぶ姿を見たり、波の音・風の音・虫の声を聞きながら自分自身も自然を感じたり、自然環境、を見ることで、保護者の方も参加してよかったと思っていただけたようである。夏の海は、そこにいっただけで楽しく、そして穏やかな海を見ていると、自分自身も穏やかな気持ちになってくる。特別なプログラムはない事業ではあったが、のんびりとした時間を過ごす中で、改めて海の良さ、若狭地域の良さを、参加者一人一人が感じていただくこともできた

ろう。

当施設の１番の強みは、すぐ目の前に海があるというこの環境である。この環境がよりよい時期にフェスティバルを開催することで、ここに施設があることの意義や自然体験活動の楽しさを、参加者に伝えることができるのではないかな。

今後は、地域の様々な団体や機関にもより協力をいただき、魅力ある事業になるよう工夫していきたい。

○自然体験活動の入り口となるような事業とは？普及に必要なことについての一考察

１日目にキャンプ体験（大浜でのテント泊体験）を、２日目に野外炊事体験（カレーライス作り）を行った。キャンプ体験に参加したのは１８組６５人、野外炊事体験は１０組４１人であった。参加者アンケートの「⑤キャンプ、野外炊事体験などはどうでしたか」について、「とてもよい」と答えた割合は、９割以上であり、参加した多くの人（アンケートに答えた人のみではあるが）が満足してくれた。そのアンケート項目の自由記述に注目してみる。

- ・キャンプは初めての体験でしたので、テント作りから、こんな感じなんやと思いました。波の音を聞きながら、眠りに付くこと、楽しかったです。
- ・海でのキャンプは波音がよかった。
- ・初めてのテント泊、子どもは大喜びで、「嬉しい～♪」と言いながら寝ました。波の音を聞きながら寝るのは、とってもぜいたくな時間でした。
- ・自分たちでキャンプをしようと思うとキャンプ用具の準備からキャンプの計画まで大変（費用的にも）ですが、このような企画があると手軽に子どもにとって貴重な体験をさせてあげることができるので助かります。
- ・キャンプの進め方、スケジュールの詳細を A4 両面程度で、説明書が欲しい。テントを設営するエリア、テントを干すタイミングなど。

初めての方も道具がそろっていて、職員からの説明があることで、楽しく活動ができていたことが分かる。まずは、体験してみないことには、その楽しさや良さに気づくことができない。体験の裾野を広げるためにも、様々な体験ができる機会を設けることは非常に有効であると感じる。今後も参加者の「やってみたいけれど、なかなかできない体験」ができる機会として、このような機会を設けていきたい。

○海離れの現状とその課題に対応するための事業としての意義

日本財団が 2019 年 7 月 12 日に発表した「海と日本人」に関する意識調査結果（調査対象：全都道府県 15 歳～69 歳の男女 11,600 人）を見ると、7 割（73%）が「海に行きたい」と答えているが、全体の 3 分の 1（33%）が「この 1 年海に行っていない」という結果が出ている。

「海に行きたい」と答えた人の子どもの頃の海体験日数は、「年に 2～4 日以上」が 6 割以上（63%）である一方で、「海に行きたくない」と答えた人は、「年 1 日程度」か「それ以下」が 7 割程度（68%）であった。「海に行きたい」と答えた人の特徴は、子どもの頃に海に行っていたり、海で楽しい思い出があったりと、子どもの頃の原体験と関係がある。また、子どものうちに海体験があることは 9 割が大切だと思っているが、実際には海に行くことができておらず、自身の子どもへも、十分には海体験を提供できていないと感じている。さらには、自分のふだんの行動が「海」にどのように関係しているのか、意識している方が多い。一方で、「海に行きたくない」と答えた人は、子どもの頃に海に行った頻度が少なく、楽しい思い出も少ない。また、「海に行きたい」と答えた人に比べて、子どもの頃に海体験があることを「大切なことだと思う」割合が低く、自身の子どもへも海体験を提供できていない。

このような調査から見えてくるのは、子どもの頃の海体験、とくに楽しい思い出としての海体験が大切であるということではないだろうか。国立青少年教育施設の中で、最も海に近く、海の体験を中心に行っている当施設だからこそ、海での体験をするのによい時期である繁忙期に、あえてこのようなフェスティバルを実施し、できる限り多くの人に海とふれあう機会を今後も継続して提供できるようにしていきたい。

また、近隣地域には、多くの海水浴場が整備されている。県外からの参加者もいることから、

(2) 課題

●家族やグループの利用に適応した施設となるためには

当施設のふだんの家族利用の割合は約 1%程度である。団体利用を基本としているために、部屋の作りや設備などが、家族、特に小さい子ども連れの家族には対応できていない面が多々あるのではないかと考えられる。当施設の施設象の一つとして「利用しやすい施設」が挙げられているが、本年度の利用者アンケートの結果をみると、「とても思う」と答えた割合は、6割程度となっている。今回の参加者のアンケートにも、「部屋は大人にしてみたら、ちょっと狭い、暗い、臭う」「日帰りでロッカーがすべて使用中で貴重品の保管が気になりました」「お風呂も午前中も入れたら子どもの体が冷えるので助かると思いました」「キャンプファイアーまでの道が階段もあり、暗くて小さい子には少し危ないと感じました」といった内容が記載されていた。今後も、こうした利用者の声にできるところから対応をしていくことで、利用しやすい施設となっていくことと思う。今後、宿泊棟等をリニューアルする機会があれば、例えばであるが、2段ベッドの部屋8人室を和室に変更するなどすることで、明るく掃除もしやすくなると思う。また、小さな子どもたちの体験活動を実施する際には、普段以上の細やかな配慮も必要になってくることと思う。昨年度は、レストランのバイキングレーンを一段低くし、取りやすくしたところである。誰でも使いやすい施設となることで、学校団体や青少年教育団体なども利用しやすくなるだろう。

●より自然体験活動の魅力を感じてもらえるプログラムにするためには

今回は、プログラムとして、「水泳活動」「磯観察」「キャンプ体験」「野外炊事体験」「スラックライン（ウォーターライン）」を実施した。アンケートで「今度やってみたいと思う活動」を記載してもらう欄を設けた。その結果、「スノーケリング」「シーカヤック」「カッター」「山の活動」「スキー」「ボートやいかだ」「カヌー」など様々な回答があった。中でも、キャンプやシーカヤック、スノーケリングといった回答が多く見られた。キャンプについては、用具やスペースの関係から20組と限定して実施したが、その数を増やすこともまだ可能である。宿泊の希望を、本館の宿泊棟かテント泊かを選択できるようにし、より多くの人に体験してもらえるように準備することも検討していきたい。「シーカヤック」や「スノーケリング」などは、翌月の9月に実施される「ファミリーフェスティバル②～海のスポーツに挑戦しよう～」で実施する。しかしながら、一定の学年以上の年齢制限を設けており、小さな子どもがいる家族には体験できない活動もある。また、シーカヤックやスノーケリングは、親子でペアになってもらっているため、兄弟が複数人いる家族は、大人の数が足りなくなってしまうこともある。海の活動は、安全が非常に大切であり、一歩間違えると命に関わってくるため、より多くの人に体験してもらいたいという思いとの兼ね合いが難しいが、こうした2つの事業を関連させながら、海とふれあう機会を継続的に設け、その内容も充実させていきたい。

これまで、当施設の特色を活かし、海を中心とした体験を実施しているが、海と山が近いことも当施設の特色の一つであると言える。隣り合わせになっている海と山の体験の両方を体験できる機会となるように、「山の活動」を取り入れることも今後検討してみたい。

●参加者の交流や環境問題、SDGsなどの視点もさりげなく盛り込んだプログラムの提案

キャンプファイアーで参加者交流の機会があってよかったという声を聞くことができた。本事業では、この機会ぐらいしか参加者同士の交流をする機会がなかった。宿泊室についても、相部屋となることがないように割り振りができた。多くの方に参加していただける事業においては、かつて相部屋をお願いしたこともあった。相部屋については賛否が分かれる。アンケートに、相部屋ならば参加しなければよかったという記述があったこともある一方で、子ども同士がすぐに仲良くなった、家族旅行では味わえないことがたくさんあったという記述もあった。青少年教育施設のプログラムは、水泳活動や磯観察などのいわゆる「活動」だけではなく、施設での「生活」も含まれるはずである。こうした「生活」を通した参加者の交流についても、目を向け、工夫していきたい。

また、浜には、多くのゴミが流れ着き、その多くは、発泡スチロールなどのプラスチック類である。近年、海洋における環境問題の一つとして、マイクロプラスチックが挙げられている。こうした海に関する環境問題について、理解を深める機会にもなると感じている。例えば、朝

のつどい後に参加者で浜の清掃をしたり、環境問題に関する掲示をしたり、有識者を招いて話をしてもらったりする機会を設けてはどうかと考えている。多くの人が集まり、海とふれあう機会だからこそ、環境問題を自分のこととして考えることができる機会にもなるのではないかなと思う。

5. 活動の様子





【 たくさんの方のご参加、ありがとうございました 】

文責：企画指導専門職 齋藤 雄